

総務市民文教委員会行政視察報告書

市内視察における調査結果について、下記のとおり報告します。

平成29年12月4日

光市議会議長 木村 信秀 様

総務市民文教委員会

委員長	畠堀 計之
副委員長	田中 陽三
委 員	河村 龍男
委 員	田邊 学
委 員	中村 賢道（議長）
委 員	中本 和行
委 員	仲山 哲男
委 員	林 節子
委 員	森重 明美
随 行	守田 正剛

記

- 1 研修年月日 平成29年10月12日（水）、17日（火）
- 2 視察場所 浅江小学校、塩田小学校、大和中学校
- 3 研修計画 別紙のとおり

総務市民文教委員会行政視察調査結果

●平成29年10月12日（木）

（１）「光市における小中連携教育」の概要説明

和田学校教育課長

光市の学校教育の特徴として、平成18年から取組んでいる2学期制がある。当時県内外で、2学期制の採用はほとんどなかった。2学期制の準備をしている学校の状況を見たとき、教職員が自分たちの手で学校を作れるという気概を感じた。3学期を2つに分けるという作業ではなく、教育活動を見直すということで、学校や各地域に合わせたカリキュラムを作れる、教職員自身で子どもたちに必要な教育を作れるという雰囲気生まれた。

小学校では、特に運動会等の行事の時期を移すことを考えるにあたり、学校行事と地域行事を含めた動きが起こった。

地域と腹を割った付き合いをする中で、地域の方から、学校に対して何かできることはないかとの目を持ってもらえ、地域の方々とのやり取りの中で、現在のコミュニティ・スクールが形付けられた。しかし、地域行事は学校行事に合わせて組まれていたので地域との話し合いを継続的に行った。



（２）浅江中学校訪問

小中連携について

教育現場から見た現状及び連携による成果と課題

（浅江小学校 酒井校長、浅江中学校 二宮教頭）

浅江小（酒井校長）

小中連携、コミュニティ・スクールについては浅江だけでなく光市全体で進めている。幼保小中、基本的に15歳までの子どもの育ち、学びにしっかり関わっていかうという縦の連携、そしてコミュニティ・スクールやPTAを中心とした横のつながり、この縦横で今の光市の教育、連携協働を重視した教育は進められている。

浅江小中の先生が共通理解で進めているのが、「気づき・考え・行動できる」を教育目標としている。そして、9年間でどのような子どもを育てるか確認をしている。どの中学校区にもこれがある。具体的な中身については、まず組織が小学校は4部会、中学校は3部会制をうまく合わせながら研究を進めている。29年度の進め方、基本的な考え方で今年度の中心的な課題として、小中で共通する視点の多い「道徳・特別活動・総合的な学習」、小中間での支援方法の継続性が強く望まれる「特別支援教育」、今後小学校3年生からの必修化が行われ、小中の連携の必要性が高まる「外国語活動・英語」、現在小中で乗り入れの授業を実施している「算数・数学」の4領域に絞り内容の濃い研修を行っている。すべての教員がこの4つの部会のどれかに所属して小中で連携もして、授業案や指導案を一緒に作ったり、授業を公開して研究協議を進めていくこととしている。見える形では、夏休みに小中一緒に拡大学校運営協議会を実施している。これは教職員と保護者と地域の皆さんが100人以上浅江コミュニティセンターに集まって、グループごとに協議をしていくことをした。特に今年はいいさつプラス1作戦のPRの強化として、のぼり旗の作成をしている。

成果としては、1点目は教職員だけでは対応できないような多種多様な学習体験、学習経験を提供できるということ。例えば小中だけでいけばサマースクール、水泳指導、陸上指導、掃除の仕方、そして中学生は小学校にきて児童を指導してくれるといった機会を定期的に設けている。逆に小学校から中学校に訪問して授業や部活を見せてもらったり、あるいは体育の授業に参加したりと色々なことを既に進めている。2点目は、コミュニティ・スクールでは信頼できる大人と出会うことが出来る。色々な指導をいただきながら褒めてもらったり、時には注意されたり、本当に教職員以外の人と出会えるというのは非常に強みだと思っている。大人以外にも中学生や光ヶ丘高校の生徒も来てくれて、先輩と出会えるのはタテの関係の中で素晴らしいこと。また、本校の児童が幼稚園や保育園の園児たちと交流することもある。憧れや自己肯定感、自己悠揚感が高まっていると思う。3点目は、登下校の安心安全の確保についてで、朝だけでなく下校時に地域の方々に寄り添われながら帰る。4点目、コミュニティ・スクールの3つの機能、学校運営、学校支援、地域貢献の三本柱がある。小学校の役割は、地域を元

気にすることだと考える。したがって子どもたちには地域のさまざまな子どもたちには地域の様々な催しや行事に、保護者と一緒に参加し盛り上げていくというのは大事なこと。課題としては行事がビルド&ビルドでw どんどん増えており、これらをうまく統合させながら、国からも言われている教師の負担軽減を図るうえで、教職員の用務の改善をやることが校長としてある。したがって、コミュニティ・スクールの取組みの充実とともに業務改善の視点やバランス感覚を見ながら学校運営をしていかなければならない。

浅江中（二宮教頭）

小学生は不安を抱えて中学に上がってくると思うが、日ごろの連携によって不安が軽減されているように感じる。中学校がどういうものか十分理解して中1ギャップの緩和が一つの成果としてある。今度は中学生という先輩としての自覚とか、自分が役に立っているなどの思いもあるだろう。教職員の立場では、小学校でこういう指導がなされたという現状を把握することにより、指導が継続的に進めていけるという効果が出ている。当然子どもの様子もよくわかるので、情報共有の点からも有用であり、同じ目標で子どもを育てていくという協働スタンス、地域の大人も協力して9年間で目指す子ども像が教師の中に芽生えてきている。

最後は根本的な問題だと思うが、生徒、児童、教職員間の人間関係が濃密になりますので、知った者同士が活動していく形になるので人間関係や連携を深めるのに役立っているのだと思う。

課題については、小中で物事を進めていくのにまずは打ち合わせが必要だが時間がかかる。あと、活動を練っていく中で我々も研修時間を確保しなくては行けないのでなかなか難しい部分はある。小中の行事は当然違うので、日程の擦り合わせの問題もあるが、課題はどちらかというと教師側にあると思います。

Q、連携教育の推進のための組織で4層構造に話が出たが、具体的に。

A、学校運営協議会が上位組織としてあり、次に企画委員会がある。これは教職員、保護者地域の方々の協議の場。次に教職員とPTA。そしてボトムに教職員の会議がある。小学校は4部会制で、教職員がいずれかの部会に所属しているので、浅江中がコミュニティ・スクールに取組んだ時に、とにかく省職員の声、思いが学校運営協議会の取組みに繋がって、教職員がやる気をもってできるために作り出した。その当時全国でもなかった取り組みで、実際子どもたちに関わっている教員の考えを入れて行こうというためにそのような構造とした。これがモデルとなって、県内同じような取組みが広まり、浅江小はPTAを入れて4層構造となった。

Q、他の学校からきてコミュニティ・スクールの取り組みを知って先生たちは驚くのでは。

A、コミュニティ・スクールは周知されており、体験してみたいという思いで

来られる方がほとんど。忙しいことに間違いはないが、先生一人ひとりがやりがいを感じる。単なる業務量では測れないものがあり、それは自分が頑張った分だけ子どもたちの関係で返ってくるし、保護者や地域から大切にされると伊野を教師自身が感じている。だから、教員は自信をもっているような教育活動ができるというのはプラスになる。

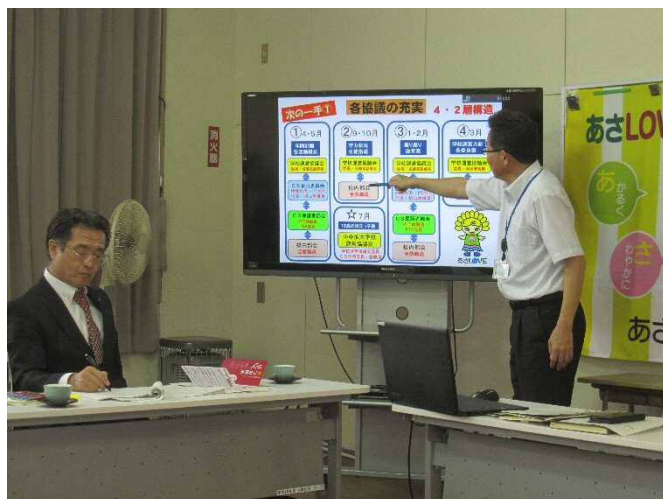
Q、受験生なども抱えていると思うが。

A、まず、子どもがすごく落ち着いている。地域の人と触れ合ったりつながりを持つことで、生徒指導の面で非常にプラスとなっている。学力の状況も全国100に対して110から114という結果が出ている。落ち着いていることが、きちんと学習する習慣にもつながっていると感じる。教職員だけが頑張っても成果は出ない。正にコミュニティ・スクールの力、子どもに関わる大人の目が多い、そういった中で子どもは褒められたり、頑張っている姿を認めてもらえるというのが学力にも跳ね返っていると思う。

一般的に大変といわれている生徒指導と保護者対応。その辺りがすごく軽減されている。

Q、今の連携で満足なのか現場の生の声をお聞きしたい。

A、浅江は1小1中で距離も近い。授業と会議をかなりやっているのでもうまくバランスをとりながら、しかも中身が充実するようできないかなとは考えている。小中の先生の関係が密になっているので、気持ちの距離が近くなって信頼しいろんな話ができるようになったと思う。





10/17

(1) 塩田小学校 学校訪問

・ 複式学級について

1年生1人、2年生7人、3年生6人、4年生4人、5年生3人、6年生5人の3クラスで全児童26人。1年生及び2年生は1クラス同じ教室でそれぞれの学習内容を、同じ時間に同時に進行するというのが複式学級である。1・2年と3・4年生は背面型、前と後ろに向きを変えて行う形。5・6年生についてはL字型。他の学年の授業が耳に入りすぎて進められないということが出てくるので基本は背面型にしている。5・6年生はその点集中できるし、人数的な部分でL型としている。その方が教員にとって渡りがしやすいことが挙げられる。

3・4年では、授業ごとに児童がリーダーとなり、授業の進め方や進捗管理をするなどの、リーダー学習も実施している。

また、2年生と1年生を混ぜて、2年生に1年生が解りやすいように勉強の説明をさせたり逆に1年生が問題を作って2年生に復習がてら回答させたりと、複式の良さを生かした形で進めている。1人では対話もできないのでその観点からもよいと考えている。

・コミュニティ・スクールについて

1年間、地域の方々に協力いただきながらコミュニティ・スクールを進めている。多くの行事を行うことにより活動の場が広がっている。小規模校では大人数の中で発言する機会が少なく、いろんな場面で児童が自分の考え方を表現する場も拡大している。

・小中連携について

コミュニティ・スクールを進める上でも、小小連携、幼小中連携が必要。今度の新学習指導要領の対話的・主体的という部分では、会話というのが重視されてくる。複式では他の学年の子どもと話し合いをしながら物事を進められるという点では非常に有意義であり、同じ学年の他の学校の子ともと交流をする機会を増やすことが重要である。

Q、単・複式とある場合、特別なカリキュラムを組まねばならないと思うが先生の負担はどうか。

A、複式は大変であると思う。先生方もベテランなので教える内容は理解できても、2つの学年を一緒に教えるという部分で、授業内容の工夫など放課後に作成することになる。T2（校長・教頭）が教えたり様々な取組みをしている。国語・算数は毎日1時間ずつあるので複式の計画を立てている。他の教科についてはA年次、B年次なので一緒にできる。

※AB年次：2つの学年の内容を2年間で学習すること

Q、小中連携で、複式学級から上がる子供と単式学級から上がる子供とで特徴の違いはあるのか。

A、リーダー学習を行っているので統率力のある子供が多いと中学校から聞いている。

Q、中1ギャップの解消の効果についてはどのような評価をしているか。

A、不登校になる傾向の子供が少ないと聞いている。大人数の中で適応できる方法を今後も考えていきたい。





（２）大和中学校 学校訪問

小中連携について

大和地区の小学校は４つあるが、小規模校が多く中学校に上がっても、１学年 50 人位でぎりぎり 2 クラスある状況。昼休みには、同じ学年のクラスが隣にあるということもあり、クラス交流が活発で楽しそうにしている光景が目に見える。現在取り組んでいる中学校に上がったときに、スムーズに移行できる取組みが少しずつ実を結んでいると思う。

大和は、平成 22 年～23 年度に国の教育政策研究所の指定を受けて 2 年間の小中連携の教育の研究に取り組んだ。現在の小学校と中学校の学びのつながり～確かな学びと豊かな人間関係の確立を目指した小中連携教育～を、平成 29 年度の研究の課題として取り組んでいる。小中連携について大切にしていることとして①学びの連続性と適時性②9 年間を見通した指導のイメージの共有化③小中学校の教職員による協働型実践の 3 つがあり、特に各小学校が離れてあるので協働して 4 校が一体としてやることを大事にしている。大和中でも中 1 ギャップで不登校が増えたり、人間関係のトラブルなどが大和という小さい地域の中でも

起こりうるので、小中連携取組みによって中1ギャップにつまずくのではなく、新しい環境や人間関係の中で、中学校入学が飛躍のチャンスとなる中1ジャンプとなるよう連携をさらに強めていく。連携のメリットとして学力の定着や向上に効果があるとして、全国学力学習状況調査による課題を共有して授業の改善に活かしていく取組みを進めている。更に、学力向上を支える土台が必要であり、学びを人生や生活に活かそうとする学びに向かう力や人間性を育てていくことが学習意欲の向上につながるということで、大和地区の教科担任をはじめ、養護教諭、生徒指導、教務主任が集まって相談したり、あるいは光市のコミュニティ・スクール担当、特別支援学級教諭が学力を伸ばしていく部分と、土台となる部分も小中連携で捉えて育てていく取組みをしている。

Q、連携において、多小1中の地理的な要因をカバーする工夫をはしているのか。

A、組織を作って人を集めなければ連携はできない。まずはそこがスタートで、そこにコミュニティ・スクールの情報交換会の場でも入ってもらい、地域と一体感が生まれるのだと思う。

Q、現時点での小中連携の評価を聞きたい。

A、あれもこれもやろうとすると身につかないことが多い。全学校でこれだけはやり遂げましょうという一点突破で何かをやるといろんなことが一緒に身についてくるもの。今まで各学校がバラバラでやっていたことを、きちんとした組織を作って一体化してひとつの局面でやるというのは意味があると思う。学力も大和地域では高いレベルにある。



市内視察

【畠堀委員長】

浅江小・中学校では、「小・中学校連携教育推進委員会（両校の校長、教頭をはじめとする関係教員が連携教育の基盤となる考え方、めざす生徒像、育てたい力等を設定し、その活動を確認しながら方向性を検討）」「小中連携教育企画推進協議会」「3つの部会（学力向上部会・生活向上部会・体力向上部会）」が設置され、目指す子ども像「気づき、考え、行動できる浅江っ子」の実現に向け、小・中学校の教員が連携した取り組みが行われています。

本年度は、小・中学校で共通する視点の多い「道徳・特別活動・総合的な学習」、小中で継続支援が重要となる「特別支援教育」、小中乗り入れ授業を実施している「算数・数学」等の領域に絞った研修に取り組まれています。

大和地域小中連携教育の取り組みでは、1中4小で施設が点在し教職員の移動や児童生徒の交流が困難な状況下、「小中学校の教職員が、学びの連続性と適時性を意識し9年間を見通した指導イメージ」を小中学校の教職員が共有化する協働型実践として取り組まれています。その中で、中1ギャップの解消に継続して取り組むとともに、知識・技能（A 学力）や思考力・判断力・表現力（B 学力）の向上を図るとともに、それらの基盤となる学びに向かう力や人間性（C 学力）の涵養に取り組まれています。

光市では、平成26年度より市内全小・中学校でコミュニティ・スクール（CS）が導入され“地域とともにある学校づくり”が進められています。各学校運営協議会を通じて小中連携やCSが積極的に進められており、児童生徒の自己肯定感の高揚につながっているとのことでした。

小中連携による縦の連携、に加えCSにおける地域との横の連携により成果に結びついていますが、縦横の連携が光市全体で進められており、今後の小・中学校間の連携のさらなる充実に向け、小中の一体型による義務教育学校についても、実施可能なところから実施できるよう検討することが必要だと思いました。

【田中副委員長】

浅江小・浅江中学校では、地域との深い関係を武器に、地域財産を活かして発展的に子どもたちの教育につなげている事に魅力を感じました。

教職員の多忙改善のため、組織の見直し等を行っているが、地域・保護者の理解が一番必要であり、コーディネーターの役割が大変重要だと感じました。

塩田小・大和中学校では、初めて複式学級の授業見学、CSのお話も聞かせていただき、確かに光市が歩んできた小規模校の良さも感じましたが、一方で、2学年のカリキュラムを1人で作らないといけない等、少人数で対応する教職員の負担は大きいと感じました。

また、中学校区全体の少子化が進む中で、子どもの推計人口を見ると近い将来に中学校でも1クラス化になる事が見て取れ、中学校自体の運営が厳しくなることは間違いなく、将来の子どもたちの教育のために、まちとして早急に魅力あ

る取り組みを行う必要があり、市民と情報共有と話し合いが必要である。と私は思いました。

【河村委員】

今回、2回に分けて小中学校の視察研修を実施しました。最初に従前大規模校と云われていた浅江小学校へ見学に行きました。現在は児童数も少なくなり、普通程度の学校になりましたが空き教室が多く、いたるところ手作業での修繕がたくさんなされ、最近では文科省や県教委から多くの視察があると聞いていましたが、一度内装についても大規模修繕が必要と痛感させられました。コミュニティ・スクールについて、小中学校からプレゼンを受け小中学校共にうまく運営されていると感じましたが、中学校には訪問しておらず説明だけだったのが残念でした。その後、教室の授業を参観して元気な子供たちに触れることができました。給食センターの土地を一部駐車場用地に購入したので、学校全体の教室、体育館の施設整備が必要と感じました。

別日に大和地区の塩田小と大和中を視察しました。塩田小は複式学級の為、かねてから参観希望を持っていましたが、最初に小中連携、コミュニティ・スクールについて説明を受けたのち、5・6年、3・4年、1・2年と授業参観しました。1・2年生は大変だと思っていましたが、5・6年生を同時に授業することの大変さを感じさせられました。大変立派な校舎、体育館、グラウンドで有効活用しなくてはと思いました。次に大和中へ訪問、説明を聞いて帰路につきましたが、帰り際、特別授業を垣間見ました。多感な中学生をうまく社会人へ導くことの大変さを理解しているつもりですが、もっと中身を深く見学したいと思いました。

【田邊委員】

総務市民文教委員会は、光市の学校教育「生きる力を育む学校教育の推進」を柱にして、「連携・協働を基盤とした学校づくり」という意図の下に、10月12日浅江小学校、10月17日塩田小学校、大和中学校と2日にわたり光市内の小中学校の視察を実施しました。主な視察事項である、学校現場から見た小中連携教育の取り組みと概要についてと、また、複式学級の授業参観でありました。

浅江小学校での、9年間で目指す子供像として「気づき、考え、行動できる浅江っ子」という目標を掲げて、小中9年間を通して学校、家庭、地域のつながりの中で育むことを目指しており、小学校、中学校で連携して「小・中合同学校運営協議会」を実施し、各種の方策、対策等で改善策を提起し「地域と保護者、学校が知恵を出し合い、未来を担う人材を育成する」という、「あさなえメインテーマ」を目指して切磋琢磨、努力しておられました。

塩田小学校の複式学級の授業参観は、「わたり」という方法が職員に対して負担であるが、少ない学級の授業のやり方として、対話的、主体的な部分を大事にして行っている。また、平成22年から小中連携についてのデータを取り、いろいろな課題を抽出して中学校がわに引き継ぎ「中1ギャップ」の解消の為に、「ふれあい交流会」を小中連携で行い、4校の小学校でカリキュラム等を考えて、今

後行うという事でした。

市内視察の総括として、光市の小学校、中学校の視察を行いました。学校教育についての大綱的な基準である学習指導要領の改訂等の問題もありますが、教育の目的は個人の「人格の完成」をめざし、子どもの生きる力を全面にわたって育てること、学童の成長の過程を重視した小中連携のあり方を望みます。

【中本委員】

・浅江小中連携教育について

光市の学校教育理念に基づき幼保小中学校の連携と、全ての公立小中学校がコミュニティ・スクールとして、学校、家庭、地域が連携をとった教育を展開している。そして、浅江っこを、小中9年間を通じて、気づく、考える、行動できるこの三つの目標を目指して積極的に取り組んでいる。更には、三つの部会で目指す子供づくりに向けた、知・徳・体の基盤づくりを進めて育てる。地域と保護者と学校が連携して子供を育てる体制づくりができていて、小中学校や、地域のリーダーが沢山おられることで先駆けての取り組みが良かった。連携教育の素晴らしい研修になりました。

・大和小中連携教育について

大和小中連携教育も、光市の学校教育理念に基づいた教育を展開している。大和は、小中の「学び」のつながり、豊かな人間関係の確立を目指している。

この地域は、1中4小で、施設が離れているため教職員や児童の移動等が困難であることから連続性と適時性を意識、9年間を見通した指導する。

大和の特色を活かした連携教育「大きな和の里」を大きな柱として、文化の融合した取り組みを推進する組織は、社会教育、福祉、束荷・塩田・大和のコミュニティ・3つの幼稚園・企業・地域の方・PTA・1中4小との連携教育推進協議会です。この大きな組織の中で、それぞれが連携して、大和地域の将来の子供たちのため、繋がりを大切にする取り組みの研修は、勉強になりました。

今、光市では光市立学校の在り方検討会議で基本構想（案）が示されました。連携教育の取り組みが将来の小中一貫教育（義務教育学校）へと光市の学校教育が大きく変わる改革だと思います。研修を通して、現場での取り組みの実態、地域と学校とPTAの繋がりの大切さを改めて感じました。

【仲山委員】

小中連携教育の概要を聴き、2学期制がきっかけとなって進んできた一連の改革の状況が理解できた。小中連携教育とCSの取り組みは相互に関連づけられ効果を生んできていること、会議・研修での教員同士の共有・確認や相互乗り入れ授業等により、小中の学びの質的変化への順応を図っていることなど学習面での成果をあげている。

浅江小学校：小中各1校の連携について現場はその効果を実感しつつ、高いモチベーションで取り組んでいる状況を聴く。CSの取り組みもさかんなこともあり、教員の多忙化の実態は無視できないレベルと思われる。

塩田小学校：複式学級の実際を見学して、人数・授業内容により多様な形態で工夫されていて却って深い学びが得られる可能性を感じた。複式学級は指導力のあるベテラン教員が配置が必須と思われる。

大和中学校：小4中1の連携だが、小小・小中の連携が各種の部会を通じて行われ、またCSの取組みもさかんで、いい状況と見受けられた。こちらも浅江と同様、教員の負担が大きいことが課題。

【林委員】

少子化の影響で人間関係が固定化しやすい中、児童生徒が沢山の教員や児童生徒と関わる機会が増えることで、中学校進学への不安が少なくなる。中学生が小学生に接することで、年長者としての自覚が生まれ、その経験が自信となり成長し自己肯定感を高める。

幼保連携も同じで、児童が成長し優しく接する機会が生まれる。

情報が共有できる利点がある一方で、同時に活動することは日程の調整が難しいため、回数に限界がある。教職員の業務が増えることから、本来の授業、指導に専念できるよう業務改善が必要である。

地域の取り組みに、親と一緒に参加することにより盛り上がり、地域貢献につながる。コーディネーターが月1回（1校1名）話し合いを持つことにより、心のサポートをしている。

【森重委員】

光市立学校の将来の在り方検討会議が6回目をむかえる中、学校現場の活動状況・意見聴取等調査を行いました。CSの全国的先進地浅江小中のCSは、中学校区を核として9年間の学び・見守りの教育環境づくりが地域を巻き込み推進されており「地域と連携した学校づくり」の深化は1小1中の小中連携教育へのスムーズな移行促進剤となる事を感じました。

また大和地域における4小1中の小中連携教育に関しては、4校が分離している事の付加・課題調整にかかる時間や人用がどのような目的観や価値創造に繋がっているのか。また付加を負担とするか価値とするかの分析は今後必要だと感じました。人口減少に伴う複式学級の在り方も然りです。光市としてどう扱っていくか、今後持続可能な取り組みなのか検討委員会の中でも率直な議論・研究を期待いたします。